

出版業界からみた箏曲教室の歴史と発展

大日本家庭音楽会社長 坂本正彦



近年箏曲界の衰退がいよいよ深刻さを増したと言われますが、過去にも数回危機と呼ばれた時期がありました。江戸時代の最初の危機は生田検校が当時流行の三味線音楽を地歌として取り入れる事により隆盛を極め、今日まで生田流としてその名前が残っています。明治に入ると身分制度としての当道の特権も廃止され、文明開化の荒波の中で生きて行く為に検校達も寄席に上がったとの話が残っています。

この危機を乗り越える為に考えられたのが、欧米の上流家庭で盛んに行われていたホーム・ミュージック即ち、家族で行う音楽会でした。日本では父が尺八を、母と娘が三味線と琴を演奏する。これが新しい日本の上流家庭の嗜みとされました。明治43年設立された弊社の社名の家庭音楽界もここから由来したものです。更に、大正時代には一般の女性が琴教師になる事が出来るようになりました。盲人の優れた記憶力を持たない、普通の女性には琴の楽譜という便利なもの普及しつつありました。我々の古い楽譜の初版が統べて大正2年となっているのがその現れです。当時まだ少なかった女性琴教師の門には、新式楽譜琴教授という看板が掛けられました。

昭和には宮城道雄や筑紫歌都子等の箏の人才が現れ、多くの若者を魅了しましたが戦争・敗戦と混乱が続き、焦土にジャズが流れ、邦楽は壊滅的な打撃を受けたと言われました。それでも昭和30年頃には空地の奥から少しずつ琴の音色が流れて来る様になり、30年の東京オリンピックを境に日本は高度成長時代に入り、華道・茶道・箏曲を代表するお稽古ブームが日本中を席捲しました。最初は戦争

中で何も習い事が出来なかった母親達が、娘達には色々習い事をさせてあげたいという思いから始まり、大量に若い女性労働者の確保を求めていた会社・工場等が働きながら花線修業を誦い文句に各職場には箏曲クラブなるものが出来ました。先生一人ではとても依頼殺到の職場のクラブを廻りきれず、この頃即製の箏曲教師が各流派を中心に大量に出現しました。戦前までは習い事は毎日先生の元に通うのが一般的でしたが、この頃では週に一日の稽古が普通となりました。従って先生は多くの弟子を指導する事が可能となり、この頃の琴の先生は平均50人の弟子を持ち、演奏会では指導を行っている学校・サークル等の生徒を合わせると出演者総数100名以上と言うのが一般的でした。短大に行って会社に勤めるより、内弟子になって琴の先生になった方が取入が良いと言われた時代でもありました。

昭和50年代になると低成長時代となり、若い女性にとって結婚より就職の方が最大の日課となりました、習い事に代わって車の免許・英会話・ワープロ等の資格習得に関心が高まり、箏を習う若い女性が急速に減って行きました。しかし50年代は現代邦楽という洋楽器系の作曲家が邦楽器による名曲を次々に発表され、大学生や高校生達に大きな影響を与え、現

代邦楽がテレビ等にも放映される程にブームとなりました。その結果各地方にもこの現代邦楽を演奏する為のアマチュア合奏団が出来、学生邦楽が盛んになりました。他方、従来の琴の先生の所には、新しい入門者が入ってこないと言う声が聞かれました。ただこの学生邦楽の隆盛は、邦楽界に優秀な人材をもたらしました。現代邦楽に触発されて箏や尺八を始めた若者が作曲した作品を、若者を中心に自ら広めだしました。栗林秀明・吉崎克彦・水野利彦等がそれで、彼等の音楽を邦楽ニューウェーブと名付け各地で講習会・コンサート等を主催して行く中、平成の時代には彼等とそれに続く作曲家の作品が箏曲界の中心となっていきました。

しかし平成15年ごろからこの邦楽ニューウェーブの熱気も次第に離れていくのが感じられます。昭和40年代の琴ブームで大量に生み出された先生方の高齢化がその主たる原因と思われまます。社会全体に少子高齢化が進み、日本全体が活力の無い社会に成りつつあります。現代邦楽からニューウェーブの音楽は若者のエネルギーを必要とするリズム主体の合奏曲となっていて、活力ある時代の若者文化の一面を担っていた事に過ぎません。

そういう中で、最近琴でポップスを弾くという従来考えられない

事が盛んになってきました。これは当初、琴の学校教育導入に際し子供達に興味を持たせるための試みでした。ところが琴でメロディーを弾くと、同じメロディーを他の楽器で聞き慣れている子供達には狭いメロディー表現には聞こえないという例が山ほど出てきました。単音の美しさでは琴はピアノやギター等より遙かに勝る楽器のはずなのに、合奏練習の中で大事な個性も爪音も捨ててしまったのでしょうか。琴の魅力は何処に有るのか、琴にしか表現できない世界をもう一度求めなければ琴復活への道は無いでしょう。時はリズムからメロディーの時代へと変化しています。音楽に優しさや癒しを求めているに違いありません。琴のポップスはその入口に過ぎません。その先に琴にしか表現出来ない、琴だからこそ表現できる曲が近い将来必ず出現し、琴復活の道が拓かれるものと信じて出版活動をして行く所存です。

大日本家庭音楽会社長
坂本正彦
プロフィール
一九四一 大日本家庭音楽会創立者兼祖父に、箏曲家筑紫歌都子と結婚しての直系の三代目として福岡市に生まれる。
一九六〇 青山学院大学英文科入学。
一九七七 著書『箏曲教師続編』出版。
一九七九 八木敏一師に琴、三弦を師事。
一九八三 栗林秀明、吉崎克彦等新進作曲家を招聘出版、エム音楽企画を設立。新人の発掘の製作販売を開始。
一九九三 大日本家庭音楽会代表取締役社長就任。
一九九四 東京音楽所を中野に開設。箏曲普及の為新進作曲家と共に『箏の会』設立。東京、大阪、北海道、四国の支部を開校。
一九九八 大阪梅田に箏曲音楽成績館を開校。
二〇〇四 梅田より開校以来の『箏コンクール』審査員としての功績に対し名誉町民称号として表彰を受ける。
二〇〇六 東京神田に音楽所並びにスタジオ開設。
現在 大日本家庭音楽会代表取締役社長、監事、著書『箏曲教師続編』代表、各種の公代表。

平成19年度総会終わる 平成20年6月6日 会場 豊科パークホテル

活動報告では、全国の子ども教室の展望と課題が活発に話された他、新規に始まった文化庁芸術家派遣事業の実績が報告されました。事業計画では、ナイチンゲール活動や、文化庁芸術家派遣事業の演奏会等の方向性が熱く語られました。



自H19.4.1~至H20.3.31	
科目	決算額
【経常収入の部】	
会費収入	1,074,000
事業収入	3,288,000
寄付収入	89,517
雑費収入	9,109
経常収入合計	4,460,626
【経常支出の部】	
事業費	3,262,948
管理費	1,199,107
当期収支差額	-1429
経常支出合計	4,462,055